

「祝祭日に關し衆參兩院議員に訴ふ」讀書メモ

平成二十二年二月十一日

各章の要点

一、戦後の祝祭日の殆どが無意味である

・「建國の日」の法条をめぐって、左野党が対立してゐるが、兩者共、現行の祝祭日に疑問を懐かず、その意義や国民生活・社会生活における役割について深く想ひを致してゐない。

・社会党の反対は、建國の日制定をそのもとに下はるく「戦前の「紀元節」と同日にしてはならぬ」といふ点にある。

「祝日」

お祝をする日。特に国を定めた祝の日。現在十五日は定められてゐる。

「祭日」

祭りを行う日

神社で祭りを行う日

宮中で重要な祭事が行はれる日

神道で死者の霊を祭る日

二、社会党は、紀元節と戦争とが結びつきを懸念し反対してゐるが

紀元節と軍国主義の間に必然的關係は無い

昔の紀元節は、いかに平和的光景か全国津々浦々に思はれたものであつた

昭和十年代以降、「建國祭」「建國記念日」に名称変更された。

むしろ、国会議員諸氏がそこで国事を論じてゐる「議事堂」こそ、戦争の歴史と歩みを一にしてゐるものではないか。

・社会党の唯物史観による近代日本史観は、明治以来、敗戦に至るまでの日本の歴史の全面否定であることに、特に留意すべきである。

三、日本古代史の専門家 直木孝次郎氏、日本古代国家論や「史実」の考へ方に、反問を提出

・「史実」とは歴史学の問題であるより哲学の問題

史実（客観）などという物は存在しない

何を史実とするか、あるものは史実としたいかという

我々の心（主観）が存在するだけ

我々の歴史につき合はなければならぬわけであって

歴史を我々の小さな自我につき合はせてはならぬ

神話や文学と歴史との間、何の相違もないのだ

四、超民主主義国 日本の現行の、年に九日の

祝日も、検証・

社会党の村山氏の主張する国民の祝日観とも、現状が全く違つてゐることを論ずる

五、国民の祝日に関する法律 第一条に見られる文化音痴

人の心も、生活といふものも、民族の歴史についても何も解つてゐない

・祝祭日とは何か、その効用は何か

文化共同体の生活を整へ、それに折目をつけ

リズムを興へるもの、或は一年を通じての

全衆衆にくり返し現れる主調の様なもの

そしてその原動力を成すものは自然と季節

人間は農耕によつて定住と生産とを教へられ
定住と生産とを有することゝ国家も社会も歴史も
成立する

祝祭日は大抵、農耕生活の行事に密接な関係を持つ
我々は祝祭日によつて、自然とのつながりを確かめ
とかく自然に反しかつて人間の生活と自然との間に
折り合ひをつけ、さうして自然と国家、国家と個人と
間のつながりを確かめ、それをその間の折り合ひをつけるのだ

祝祭日は、桃の花、菖蒲、初詣、墓参り、等々の
具體的な物、或は行事、

具體的な物や風物、行事無しでは、幼少年期や過去の
祝祭日に懐しんだり、繰返して楽しんだりすることができない

←

このことから文化の形造られ、情操が養はれる、
愛国心にしても、この様な文化感興と、情操の涵み
込めものでなければ、観念的、狂信的な騒々しいデモス
リオンになるてしまふ。

單なる休日になつてしまつて、祝祭日から、真の祝祭日に
なるために

それ値する名称と形式が必要

全面的に改正し、一年の生活リズムを形成しうる様を
統一せる系列を造り上げねばならぬ。

感想

この建白書が書かれた時期(昭和九年)に「建国記念日」「体育の日」「敬老の日」が、国民の祝日になり

今日まで九月だったのが、十二日となり、今日、平成三十二年には、海の日「みどりの日」「昭和の日」が加はって、なんと十五日にふえてしまった。恒例か、五音で書いてみる通り、日本国民にとって

祝日とは、仕事や学校が休めてうれいと感じるにすぎない日とらってしまった。戦前と云うか、戦中も、まあ、知らず知らずのうちにふえてしまった。祝日以外の祭日、季節の折りの行事も、商業主義によって、かろうじて生き残っている

状況である。また、商業主義と、そもそも我々は祝祭日と本能の欲しがるかために、それが結びつき、これは伝統的な祭りのだろうか。各地の有名な祭りは、観光客でいっぱい

日最近、ヨサコイシーランなどという踊りか、あつちの市民祭りで盛り上がりを見せている。クリスマスは、今さう言ふも思わば、バレンタインデーや、ハロウィンなどでは、日本人の消費意欲を刺激し、我々は、あつちと忙しい日常を過ごすを得ない

我々は恒例の言う通り、真の祝祭日と、無意識のうちに、求めてみるのである。それなのに、人情は、全く文化共同體を失って、我々の心理や生理を整へる、ことかできず、みるのみ、自然や季節の変化に

合致する一年の生活リズムを形成し得る様子を統一させる系列を、送り上げねばならないと、恒例は結びの部分で述べているが、その時から、早四十余年が過ぎ、我々は、統一させる系列に、かまらず

遠く、各人の各様に、お祭り(祭祀)をさかし求めて、落着き看か、日々を送っている。なんとまあ、美しい光景である。